

音楽科教育 実技研修会 終了報告

テーマ	豊かな感性に ときめく心を ～互いに学び合い、高め合い、表現する力を育む指導のあり方～	
日時	平成30年 6月 29日（金）	
会場	江別市立江別第二小学校	
講師	高倉 弘光 氏（肩書:）筑波大学付属小学校 教諭	
参加者	約 52名	
研修会 の 様子		公開授業は、江別第二小学校の6年生を対象に行われました。指導案にも明記されている通り、「この授業を通して子どもどのような資質・能力を育てたいと思っているか」という教師の思いが、発問や児童の反応から明確に伝わってくる授業でした。
		本授業は、「子どもがリズムの即興アンサンブルに親しみ、最終的には音楽作りにおける課題を子どもたち自身が実感する」ことがねらいとされていました。この、ねらい達成のための教師の手立てが、授業の随所に、適切に組み込まれており、児童の思考が実にスムーズに流れていることが伝わってきました。思考がスムーズに流れると、子どもたちは段階を踏んで難易度が上がる活動も、一つひとつ確実に行うことができ、このことは、児童の学習意欲を非常に高めていきました。
		最終的な音楽発表に向けて、どの楽器を使用するか、どのリズムパターンから入ると音楽が創りやすくなるかなど、子どもたちの思考の高まりが伝わってきます。この思考を、高倉先生が適切に取り上げ、全体に知らせることで、子どもたちの創作への思考は深まっていきました。高倉先生がねらっていた「子ども自ら問題意識を持って取り組む」ことがしっかり実現している授業でした。
		「子どもができることはその程度、と思わずに、手拍子のみの組み合わせでも、簡単なリズムうち一つでも立派な音楽だと捉えて、すごい、できたね！と、教師が思えるかどうかが一番大切なこと」という高倉先生の言葉は、改めて心に残りました。 そこで、私たち50名も丸く車座になり、手拍子を主とした音楽づくりを行いました。はじめは、隣の人が1拍たたいたら、自分がたたくというものです。手のひらを丸める、指の数を変える、手の甲を使う、強弱をつける、速さを変えるなど次第に個々の工夫が付け加えられます。
		研修会最後に行ったグループの創作発表では、手のみならず足や体全体を使って創られた「音楽」が多く発表されました。個々に考え、それをグループで話し合い、さらによいものにしようと試行錯誤を繰り返し、創作活動に取り組みました。私たち教師も楽しさや達成感を味わうことができました。まさに、学び合い、高め合い、ときめいたひとときとなりました。

